I-27

タ・ケオにおける副祠堂の基本構成と配置について

On the composition of Prasat in Ta Kev

○小島陽子[1],重枝豊[2]
*Yoko Kojima[1], Yutaka Shigeeda[2]

１．はじめに

本研究は，積層した段台基壇とその上に配置された建物との関係に着目し，クメール宗教建築の伽藍構成と造営手法の変化を明らかにしようとする研究の一部である．既報[1)]では，10 世紀中葉にラージェンドラヴァルマン王により造営された 2 つの伽藍において，上層の副祠堂と段台基壇では主祠堂を基準とした造営が踏襲される可能性が高いことを示した．

本稿では，同王の息子ジャヤヴァルマン 5 世王が 975 年頃に造営を開始したタ・ケオをとりあげる．タ・ケオは，先の 2 つの伽藍と同一工匠集団の造営と考えられるが，5 基の祠堂は方形平面から四方に前室を設けた形式へと変化し，祠堂の主材もレンガから砂岩に変わるなど，大きな変化がみられる（図 1・2）．また，王の死去により中断した工事はその後継者に引き継がれたが，その際も未完に終わり[2)]，「最上基壇の主祠堂につながる砂岩と，それ以外の石材の質の違い」[3)]は，造営に関わった王の違いによること[4)]が指摘されている．これらは造営手法に関わる重要な問題であるが，その実態に関しての詳細な検証は行われていない．

そこで本稿では，現地調査での目視による石の材質と加工状況，石材の接合の仕方の記録を基に副祠堂の基壇と身舎の構成を整理し，副祠堂の基本構成と配置について考察を行うことを目的とする．

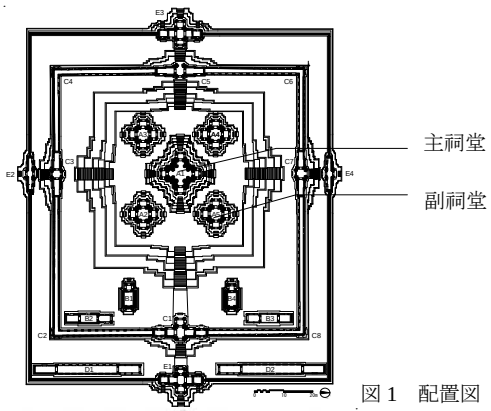

図 1　配置図

図 2 東立面図

２．副祠堂の身舎の構成

副祠堂は，基壇，身舎，屋蓋の 3 層から構成され，尖塔状屋蓋を有する方形平面の主室の 4 方に前室を設ける（図 3）．身舎は，下から基台，脚部，胴部，頂部から成り，いずれの部位の外装材も淡緑色を呈したざらざらした表面を有する砂岩で構成される．

身舎最下部の基台外端の側面は，刳形を施すために大まかな成形がなされている（写真 1）．その上にのる平滑な胴部の上（頂部）と下（脚部）では，胴部より前方に突出した材が斜めに成形されており，刳形を施す前の粗彫りとみられる．特に主室の外壁の頂部は，前室の屋蓋とほぼ同じ高さにあるが，斜めに成形がなされた頂部に前室の屋蓋を突きつけている．前室が外側に開き主室と身離れしている個所の隙間をみると，頂部の斜めに成形された部分が奥まで続いていることが確認できる（写真 2）．前室の屋蓋で覆い隠される部分に刳形を施すことは考えにくいことから，副祠堂は前室のない主室が独立した構成であった，もしくは前室のない計画がなされた時期があったと想定される．

この点についてさらに，主室の外壁と前室の側壁の接合個所についてみる．主室と前室をつなぐ出入口脇の壁体では，出隅が直線とならず，欠き取られたように凸凹の形状に鑿痕や欠損箇所がみられ，この凸凹の形状に併せて，前室の側壁に設ける開口部のマグサ材を成形し，主室側に差し込む（写真 3）．創建時にこのような造作をする必然性は想定できず，既にある主室の壁体に前室を付加した際の改造によると考えられる．主室の出入口脇の壁体は，装飾支柱の設置のために円形に刳りぬかれており，材の隅が薄くなっていることから，前室を付加する際の改造で欠損したと予想する．さらに，主室と前室の接合個所では，石材を互い違いに欠きこんで組み合わせるという複雑な造作もみられ，主室と後補の前室の緊結が課題であったといえる．

３．副祠堂の基壇の構成

副祠堂の身舎の構成から，前室が後補された可能性について指摘したが，ここでは副祠堂の最下部である基壇の構成を整理し，検討を進めたい．

基壇の外装材は，暗灰色を呈した「よく使用される

１：日大理工・PD・建築　２：日大理工・教員・建築

つやのある砂岩」[5]で，身舎の外装材と異なる材質である．基壇と身舎で外装材の材質が異なることについて，建築の構成部位で材を使い分けた可能性も考えられる．しかし，10・11 世紀に造営された祠堂では，階段脇の耳石の側面を平滑に仕上げて浅浮彫を施す事例があるが，その他の個所では刳形を施すのに対し，タ・ケオの副祠堂の基壇の外装材には，基台でみられたような刳形やそれを施す以前の大まかな成形はなされていない（写真 1）．これより，基壇の外装材は，身舎の基台で刳形のための成形がなされた後，基壇の成形がなされる前に工事が中断された可能性が高い．基壇は祠堂の最下の部位であり，工事の際には足場がかけられ，石材や工具などが落下する危険性が高いことから，その外装材の成形が祠堂の施工の最後と考えるのは不自然ではない．しかし，基台を構成する石材は，基壇の上面にはのらず，基壇上面より下方から立ち上がっており，その周りを囲うように基壇の外装材を置く．基壇は外側に大きな材を用い，基台との境には細かな材を充填していることなどから，基台と基壇の関係は，施工順序の後先と考えるよりも，基壇が当初の計画にはなく後に付加された可能性，もしくは当初計画より拡幅して造営された可能性が高いと考える．前項で示した前室が後補である可能性を考えあわせれば，外側に開こうとする前室の脚部を囲い固めるために，基壇が新たに計画された，もしくは計画変更が行われた可能性は十分に考えうることである．

４．副祠堂の配置

副祠堂の身舎や基壇の構成から，前室が後補である可能性や基壇の計画変更の可能性を指摘した．これらの可能性について，副祠堂の位置関係を分析することにより検討を進めたい．

副祠堂は，段台基壇最上段の四隅に配置されている．各建物の基壇にみられる四方の階段は，隣り合う祠堂と近接している．特に北西隅と南西隅の副祠堂では，西側の前室の基壇と段台基壇最上段の西端とが極端に近接した不自然な配置となっている（図 1）．このことは，前述した基壇の後補や拡幅の可能性を示唆している．一方，タ・ケオと同じ工匠集団が造営したとみられる 2 つのピラミッド式伽藍では，主祠堂の内法寸法と，段台基壇の大きさ及び副祠堂の位置関係が踏襲されており，いずれも主祠堂を基準として造営されている．これらの 2 つの伽藍とタ・ケオの主祠堂の内法寸法及び祠堂の数は等しいが，タ・ケオでは，段台基壇の規模が大きく，隣り合う祠堂間の寸法も大きく，現存する前室を有した 4 基の副祠堂がおさまる配置である．配置に関しては，祠堂群の構成を含めてさらに検討する余地があることを示しているといえる．

５．おわりに

タ・ケオの副祠堂の身舎及び基壇の基本構成の検証から，副祠堂は，前室がなく主室が独立した構成であった，もしくは前室のない計画がなされた時期があった可能性が高いことを明らかとした．しかし，これらの祠堂群がのる段台基壇の規模や，4 基の副祠堂は，各副祠堂の前室の大きさを踏まえたように配置がなされており，それ以前にみられた配置の手法が変化したことが示唆される．

本稿では，主祠堂の構成についての検証を行っておらず，タ・ケオ全体の造営の経過は明らかではない．しかし，既往研究で指摘さている造営工事の中止と再開の事象について，具体的な可能性の一つを示すことができたと考える．今後は，祠堂や段台基壇の寸法構成の分析を行い，5 基の祠堂の配置の手法について検証を進めていきたい．

本研究は，文部科学省科学研究補助金研究活動スタート支援をもとに行っている．

【参考文献及び注】

1）拙稿，アンコール期に造営されたプレ･ループの段台基壇の寸法構成と各建物の配置について,日本建築学会計画系論文集,第 78 巻,第 693 号,pp.2379-2385,2013／2）石澤良明『アンコール・王たちの物語』日本放送出版協会，2005／3）J. Dumarçay,1971,Tâ Kèv, étude architecturale du temple, Mémoires archéologiques, 6,Paris, EFEO／4）前掲注 2／5）前掲注 3

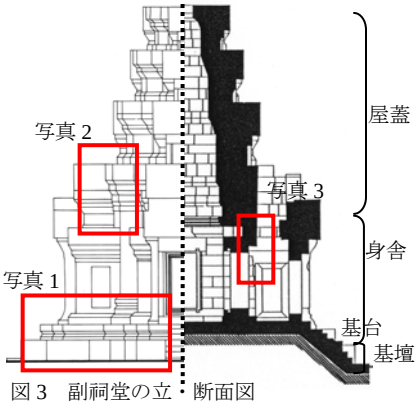

図 3　副祠堂の立・断面図

写真 1　基壇と基台

写真 2・3　主室の外壁と前室（左：外側，右：内側）